

人麻呂の近江荒都歌をめぐる

―作者の創意と時代背景―

寺尾 登志子

はじめに

柿本人麻呂は『万葉集』屈指の大歌人であるのみならず、初の勅撰集『古今集』の仮名序では紀貫之によって「歌聖」と崇められているように、王朝和歌においても燦然たる指標となつて今日に至っている。主な活動期を七世紀後半の持統朝とし、作者に関しては『万葉集』以外にその名を見ないことも、この歌人にミステリアスな存在感を与え、専門家の他からも多くの関心を集めてきた。

一九四〇年に学士院賞を授けられた歌人斎藤茂吉の大著『柿本人麿』は、その学術的価値はともかく「人麿に関するあらゆる面に及びたるものにして、従来人麿に関する著述中、是の如く博洽なるものを見ず」（受賞審査要旨）と評され、近代の大歌人斎藤茂吉による人麿顕彰の圧倒的記念碑とも言うべきものであった。近年では哲学者梅原猛によつて、人麻呂流刑死説の仮説された『水底の歌』などがブームとなったのも記憶に新しい。

作品年次の確かなものに、持統三年（六八九）日並皇子の殯宮挽歌、同十年高市皇子の殯宮挽歌、文武四年（七〇〇）明日香皇女の

殯宮挽歌がある。

巻二の標目、寧楽宮の前に「柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨む時に、自ら傷みて作る歌一首」という題詞を持つ挽歌が載ることから、和銅三年（七一〇）三月の平城京遷都の前に没したとする説もあるが、現在、人麻呂作品に描出された劇的状況と人麻呂の伝記とは、一端切り離して考えるのが一般的態度とされる。

持統天皇の紀伊・吉野行幸に際して多くの行幸儀礼歌を詠み、天智、文武の皇子、皇女たちへの献歌が見られ、「宮廷歌人」の性格を示している。

また、地方に取材した旅の歌も多い。瀬戸内海、近江、石見、筑紫の地名を詠んだ叙景歌の佳品が数多く遺された。それらは、近代の叙景歌のように、歌人が個人的境涯を眼前の景色に投影したものと異なり、律令制による中央集権国家の黎明期にあつて、国の威信が中央から地方へと伝播してゆく過程の、国家的拡充感と同一性を裏打ちし、文芸的に鼓舞する力をも有していた。

ここでは、「近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」という題詞の長歌と反歌、すなわち壬申の乱で廢都と化した大津京を詠んだ「近江荒都歌」について取り上げ、その表現と創作意図をあらためて確認し、一連の誕生した背景と享受の在り方について、若干の考察を加えてみることをする。

何が「近江荒都歌」を人麻呂に作らせ、人麻呂はそれにどう応えたか。まずは、一連の長短歌作品を読解する作業から始めたい。^{*1}

1 近江荒都歌

琵琶湖西岸の近江大津京は、六六三年に白村江の戦いで大敗北を喫した四年後、天智天皇によって飛鳥から遷都され、古代中国風の文事が花開いた都であった。最古の漢詩集『懷風藻』によれば、政府は貴族の子弟のために官の学校を創るなどして、祖国滅亡によって渡来した亡命百済人たちにも、活躍の場が大いに与えられた。

大陸風の先進文化が花開き、詩宴が盛んに開かれ宮廷に文雅の機運をもたらした。宮廷歌人として額田王が活躍し、巻二の相聞に見る近江朝の作品は、和歌による貴族の雅な社交の背景を伝えている。

けれども、五年に及ぶ大津宮の繁栄は天智天皇の死によって幕切れとなった。天智の息子大友皇子と、弟の大海人皇子が次代の皇位を争い、大海人皇子側が圧倒的勝利を得た皇位継承戦の勃発である。六七二年六月、吉野に蟄居していた大海人が挙兵し、瀬田川の合戦で大友を自害させ、首級の検分に至るまでの一か月余りを壬申の乱と呼ぶ。

その結果、近江大津京は日本の歴史上はじめて戦乱によって荒廃した宮都となった。人麻呂の「近江荒都歌」一連は、この国の詩歌がそれまで表現したことのなかったテーマを抒情化したのである。

あふみ
近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉だすき 畝傍の山の 榎原の 聖の御代ゆ 生れましし
神のことごと つがの木の いや継ぎ継ぎに 天の下 知らし
めししを 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越
え いかさまに 思ほしめせか 天離る 鄙にはあれど
石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らし
めしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は こと聞けども
大殿は こと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち
春日の霧れる ももしきの 大宮所 見れば悲しも (1・
二九)

本文は何カ所かにわたって、語句の後ろに「或は云ふ、云々」と校異が記されるが、本稿の主旨とは直接関係しないと判断して省略した。校異の多さは、その作品が広く世に知られていたことの現れと思われる。その点からも、『万葉集』巻一編纂当時「近江荒都歌」が多くの享受者を得ていたことが想像される。

長歌は内容上三段に分けられる。序破急の構成といっている。

「玉だすき」から「知らしめししを」までが、「序」の部分に当たる。「玉だすき」は畝傍の枕詞、「たすき」をかける「うなじ」と音の類似から「うねび」を導いている。「玉」は美称である。「うなじ」と「うねび」、単純な音の類似だが、「たすき」はもともと神事に用いられたから、畝傍山に厳かさが添えられる。

「つがの木の」も音の類似で「つぎつぎに」を引き出すが、この

用法を創出したのは柿本人麻呂だといわれている。⁴²

「つが（梅）」は山中に生える常緑の高木で、行動半径が著しく狭まる王朝の和歌では詠まれていないが、官吏として庶民の暮らしを身近に見聞し、地方への旅も体験していた人麻呂は、実際に梅の木をイメージして用いた枕詞だった。「梅の木」の常緑にあやかりながら、皇位は「継ぎ継ぎに」継承される。

「樞原のひじり」は樞原宮を開いた、記紀伝承上の神武天皇を示している。枕詞で荘重に、かつ畳語と助詞「の」の多用でリズムカルに展開する「序」の部分は、初代天皇以来「神」である天皇が連綿と天下を治めてきたとする。冒頭の皇統譜は儀礼歌の常套で、天皇家の正統を強調しながらその権威の由来を神話的世界に求め、詩の韻律で享受者の脳裏に刷り込む機能を持つ、不可欠な部分である。「知らしめししを」は「お治めになったものを」の意で、主語は「生れましし神」。助詞「を」は詠嘆であり、同時に逆接の意味を含ませながら、お治めになったのだなあ、それなのに、と複雑な抒情を醸している。

畝傍山の麓の樞原の宮に即位された神武天皇の御代から、お生まれになった神としての天皇がことごとく、（その地で）継ぎ継ぎと天下をお治めになったものを。

ここで人麻呂が、『古事記』『日本書紀』に採録された神話や歴史

と異なる内容を提示していることに注目したい。神武が大和の樞原に都を定めて以来、一本の「梅の木」が其処に根を張り、枝葉を青々と茂らすように神武の皇統がその地で継承され、天下を統治してきた、という叙事内容についてである。

歌人窪田空穂は『万葉集評釈』で次のように指摘する。

神武天皇以来、都はすべて大和の内であったというのは、明らかに強いことである。都は難波にも河内にも近江などにも遷されているのは明らかで、知識人である人麿がそれを知らないはずはない。

なぜ、人麻呂はこの歌で史実と反する内容を「強いて」歌ったのか。上野理によれば、「都は大和にあるべきであり、近江への遷都は、きわめて異例なことで、してはならないことであつた」と強調するためだったという。⁴³

後の「破」の部分での展開の伏線ともなり、大いに首肯できる説であるが、それに加えてもう一点、この部分に込めた人麻呂の狙いがあるように思われるが、それに関しては後述することとし、作品読解を急ぎたい。

次に「破」の部分、「天にみつ」から「知らしめしけむ」までを読んでみよう。「そらにみつ」は「大和」にかかる枕詞で、古くは「そらみつ」といった。語義未詳だが、『日本書紀』神武天皇三十一年四月の記事がその表現の起源説話を伝えている。

物部氏の始祖と伝えるニギハヤヒノミコトが、天磐船に乗って大

空をめぐり、空から大和の地を見下ろして「虚空見つ大和の国（空から見て良い国だと選び定めた大和の国）」と言ったという民間語源説である。

人麻呂の時代すでに本義は忘れられ、長歌の万葉仮名表記が「天爾満」であることから、人麻呂が「天に満つ」と解釈したともいわれるが、実証は難しい。けれども、「そら」も「みつ」も遙々とした汪洋感があり、「やまと」を寿ぐニュアンスを感じさせる。

「奈良」にかかる「あをによし」は、奈良坂付近で顔料の「青丹」が産出されたことによる、という伝えもあるが真偽は不明。この句もまた「奈良」を「よし」とする語感を持つ。

「あまざかる」「いはばしる」「楽浪の」は、それぞれ「鄙」「近江」「大津」の枕詞であるが、いずれも開明的なア段音を多く響かせ、かつ意味も平易で、導く土地を具体的に示している。文字ではなく音声で詩歌を享受する時代であったから、こうした枕詞の効果は絶大であったろう。

「いかさまに思ほしめせか」は契沖以来、注釈者の解釈が分かれる所で、遷都への批難やそしりを読みとる立場と、神である天皇の叡慮は人智に及びがたいもの、と読む説がある。近年では、「いかさまに思ふ」というフレーズが人麻呂愛用の語句であり、挽歌に多く用いられたという説明もなされている。^{*4}

そうした指摘を含め、この語句は作者の激しい情感を対象に向かって一気に投げかける効果を持つものと思われる。それまで客観

的な立場で第三者的に叙述をしていたのが、「いかさまに思ほしめせか」によって、主客が一体化してしまうのだ。この言葉を発した後、表現の重点は客観から主観に、叙述から情念へと変容する。

（神武以来の）大和を後にして奈良山を越え、いったいどのようにお思いになられて、遙か遠い辺境であるのに、ここ近江の国の、湖のほとりの大津の宮で、天下をお治めになったのだろうか。

近江遷都への忸怩たる思い、納得しかねる心持ちを滲ませながら、長歌全体の主題が、続く結論部の「急」で歌われる。「天皇の 神の尊の」は天智天皇を示している。

人事の荒廃と自然の対比から、この部分には杜甫の「春望」の一節が思われるが、杜甫の生まれは七十二年なので直接の関わりはない。だが、王朝の興亡激しい中国には、廃墟となった前王朝の旧都に立つて悲嘆する詩の伝統があり、人麻呂はそうした中国の文芸を摂取した上で、この長歌を構想したという指摘がある。^{*5}

対句表現を巧みに使い、かつての「大宮は」「大殿は」見る影もなく、「春草」が生い繁り、春の日も茫洋と霞にけむるばかりだと歌いあげ、結句「見れば悲しも」に向かって、詩の言葉が緩急のうねりを見せながらなだれ込んでゆく。

「もししき」は「ももししき（百石木）」の変化した語で、多くの

石や木で作ってある意から「大宮」にかかるのだが、人麻呂に見えるのはかつての権勢を誇った皇居の幻影であり、現実には春霞に沈んだ宮跡にすぎない。

天皇の、神である天皇様の、宮殿はここだと聞くけれど、御殿はここにあったと人々は言うけれど、そこはただ春草が生い茂り、霞がかかって春の日もぼんやりしている。かつて大宮だった所を見れば、なんと悲しいことよ。

長歌の抒情のクライマックスは「見れば悲しも」で、荒廃の跡に立ち、衰亡の極みに促された強い感情の余韻は、「反歌」という短歌定型によって再度、深く反芻される。長歌で近江京の宮殿跡に向けられていた作者の視線は、かつて大宮人が船遊びに興じた湖畔へと移動する。湖国近江の映像が立体化され、長歌の情感に具体性が添えられる。

反歌

楽浪の志賀の唐崎からなみ幸あれど大宮人の船待ちかねつ（1・三〇）
楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも

（1・三二）

「楽浪」は琵琶湖西南地方一帯の総名で枕詞化したとされ、「大津」

「志賀」にかかる。

一首目、「唐崎」は近江八景として今に伝わる景勝地である。「からさき」の「さき」が同音で「幸く」に繋がり、両者の接合によって、「唐崎」の擬人化が滑らかに行われている。「唐崎」は「から」という音の連想で、渡来人たちが多く生活し、乱の折には倭京保守層の東軍側から、ことに激しく攻撃されたものではなかったか、と想像することも出来る。

（楽浪の）志賀の唐崎は幸い変わりないけれども、かつての大宮人が乗る船を待ちきれず待ちくたびれてしまったよ。

この一首の発想は、天智天皇が崩じた時に殯もがりの場で詠まれた挽歌に先行例がある。

やすみししわご大君の大御船待ちか恋ふらむ志賀の唐崎

舍人吉年（2・一五二）

「天の下をお治めになったわが大君のお乗りになる船を、待ちこがれているのだろうか、この志賀の唐崎は。」と詠じたのは天智天皇の後宮に仕えた女性で、この歌は太后倭姫や額田王の挽歌とともに並べられ、天智天皇挽歌群を形成している。人麻呂は当然、「近江荒都歌」創作に際し、この挽歌群にも目を通したと考えられる。

舍人吉年が挽歌を詠んだ時、壬申の乱は目前で不穏な空気が宮都を覆ってはいただろう。とはいえ、表面上は大友皇子と重臣たちに

よって続べられ、平常の秩序は保たれていたはずだ。唐崎でさえ、ひたすら大君の再来を「待ちこがれる」ように。

ところが、人麻呂の眼前の唐崎は、自然の風光こそ変わらぬものの、大君どころか大宮人の船さえ「待ちきれず待ちくたびれてしまつ」ている。

二首目の「大わだ」は、湖の水が陸地に入りこんでいる淀んだ入り江、と解されている。船着き場とされた所だろう。「淀むとも」の逆説仮定条件は、既に現実になっている事態を仮定として述べ、後に続く否定を強調する。

（楽浪の）志賀の大わだは、昔と同じように淀んではいても、昔の人に再び逢うだろうか、いや逢えはしない。

水は「時間」と同じく本来流れるべき相を持ちながら、眼前には動かずに淀む「大わだ」の湖水が見える。「大わだ」は息を潜め、時の流れをやり過ぎかのようなだが、過ぎ去った栄華の時代を呼び戻すことは出来ない。結句「またも逢はめやも」の反語表現は、かつての大宮人たちに二度と逢えないことを自問自答し、諦観とともに肯っているかのようだ。

長歌で廢都となった近江京を悲しみ、さらに反歌二首ではそこに暮らしていた「大宮人」や「昔の人」を、喪失感とともに追憶し悲嘆する。それは作者人麻呂の個人的感慨というより、同時代を覆う

強い情動や気分を巧みに捉え、代弁した結果のように思われる。

当然のことながら「近江荒都歌」を享受するのは壬申の乱の勝者であり、愛惜されるのは戦いで亡くなった近江側の人々である。敗者の死を悼む思いには、贖罪の意識も潜んでいたことだろう。

こうして、「近江荒都歌」を読んできると、近江京への挽歌的性格がおのずと読み取れるのだが、天智天皇を神武以来の正当な皇統と認めながら、その都の滅びはあたかも不可避の必然であつたかのような印象が読後に強く刻まれる。

一連に天智の遷都を直接批難する表現は出て来ない。大津京を滅ぼした原因にも言及せず、豪壮たる宮都の伽藍や大宮人たちが、自然の衰微のように滅びていったことを愛惜する抒情に満ちている。

そこには、天武、持統に連なる皇統として天智を認めながら、大津京そのものを、その継承者であつた大友皇子の存在も含めて、初めから無かつたものとし、無視するかのような意図がうかがえる。

冒頭で人麻呂が創出した神武以来神である天皇がすべて大和で統治し続けたという神話的物語は、ただ近江遷都をタブーだったというのみならず、近江京そのものの存在を認めず、歴史から除外しようとする作意を誘導するための、詩的創意だったのではなからうか。

2 鎮魂という動機

なぜ人麻呂は「近江荒都歌」を創作したのか。作品が求められた

背景について考察を加えるため、ここで少し持統天皇の境涯に触れる必要がある。

壬申の乱の翌年（六七三）に、大海人皇子は即位し天武天皇となり、鸕野讃良皇女（後の持統）が立后したのだった。鸕野皇后について『日本書紀』持統前紀が「皇后、始めより今に迄るまでに、天皇を佐けまつりて天下を定めたまふ、毎に侍執^{つかへまつる}際に、すなはち言政^{こと}事に及びて、毗^{たず}補ふ所多し。」と記すように、皇后時代から十五歳年上の夫天武をよく補佐し、これ以上ないパートナーとして天皇中心の律令国家を創り上げた。

天武の崩御は六八六年、いよいよ嫡子草壁皇子を即位させる時である。天武との一粒種に皇位を継がせるため、持統は天武十年（六八一）に草壁を皇太子にするなど万全の布石を打っていた。天武の葬儀が二年三ヶ月と長きにわたったのも、遺児草壁を偉大な天武の後継者として印象づけるため、という側面もあったろう。草壁皇子は、参列する数多の高位高官たちを前に、天武葬送儀礼の中心的役割を果たしていた。

天武が崩御して半月後には、大津皇子事件があった。草壁の強力なライバルと目された大津皇子の謀叛が発覚し、即刻処刑されたのだ。発覚から処刑まで電光石火の勢いで事が運ばれ、関わって処罰された者の数が少なかったことなどから、持統が大津皇子排除を目論み、皇子を孤立させ挑発して謀叛にいたらしめた、と考えられている。

巻二「挽歌」の部の持統朝はじめには、大津皇子の姉である大伯皇女による挽歌が四首並ぶ。大伯の歌はいずれも哀切で、巻三に収められた大津皇子辞世の歌とともに、悲劇の姉弟による歌物語をなしている。次は、二上山に葬られる弟に呼び掛けた悲歌。

うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む^{いそせあ}

（2・一六五）

「この世の人である私は、明日からは、（弟の屍が埋葬される）あの二上山を弟として眺めるのだろうか。」と歌うが、「我や」の「や」は反語に近い強い疑問を表し、弟の処刑という受け入れられぬ現実に茫然と我を失う姉の姿が見えてくる

飛鳥から西北に眺める二上山の夕映えは見事である。大伯は、雄岳と雌岳の連なりを、自分たち姉弟が手を取り合う姿に見立てて悲嘆するのだらう。その心を歌集に据えることで、二上山に葬られた大津皇子の慰霊が図られたのではなからうか。

次は大津本人の辞世歌である。

百伝ふ^{もつた}磐余^{いはれ}の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

（3・四一六）

「百伝ふ」は百に段々近づくという意味から「五十（いそ）」や「八十（やそ）」に続く枕詞で、「い」と同音を持つ地名の「磐余」にも続く。眼前の池と水鳥の景が、いつまでも続くであろうことを偲させる語感があり、下の句の絶句が痛ましい。

「磐余の池で鳴き続ける鴨を、今日を限りとして眺め、こうして

死んでゆくのだろうか。」

この一首が、勅撰集の性格を持つ巻一、二に載らず、持統の死後拾遺的に編纂されたとされる巻三の挽歌に収められているのも、持統が事件に深く関わったことを思わせる。

思えば、大伯皇女と大津皇子姉弟の母である大田皇女は持統と同様に天智の娘であり、持統にとっては同母の姉にあたる女性であった。大田は二人の幼い愛児を遺し若くして死去したが、もし生きていれば、天武の第一の妃となった可能性が高い。

女人の生死の偶然までもが、「持統天皇」の出現に肩入れしているようであり、この女帝の並々ならぬ知謀と強韌な権力意志が個の資質を越えた天命とも、選ばれた者の恩寵とも思えてくる。

皇位継承者たる息子のライバルを葬り、皇太子としての我が子を強く演出し、夫天武を檜隈大内陵へ本葬した持統の胸には、ようやく安堵の思いが萌したはずだ。しかし、それもつかの間、草壁皇子は父の本葬の後、わずか半年足らずで急逝してしまう。享年二八であつた。

その即位を懇願した我が子の不慮の死によつて、女帝が大きな衝撃に見まわれたことは容易に想像される。それは夫天武の死以上の悲嘆と落胆であつたろう。

そうした心痛の中で、天武の皇位継承者の死は十七年前に滅ぼした近江京の大友皇子惨殺に結びつきはしなかっただろうか。草壁の死の原因が天智と大友父子の怨念と結びついた時、持統にとって近

江朝の鎮魂は火急の課題となった。とすれば、人麻呂の「近江荒都歌」とは、草壁皇子薨御による持統の落胆と悲嘆が、おのずと求めた鎮魂の形象化であつたということになる。

草壁皇太子の慰霊と天智天皇の関わりについて論証した渡瀬昌忠の説を紹介しておきたい。^{*6}『日本書紀』に記載された持統四年七月十四日の記事に注目し、天智発願による近江の崇福寺をめぐる草壁皇子慰霊の内容である。

是の日に、純・糸・綿・布を以て、七寺の安居の沙門、三千三百六十三に奉施したまふ。別に皇太子の為に、三寺の安居の沙門、三百二十九に奉施したまふ。

「安居」は「夏講」ともいい、インドで夏の雨期の間遊行をさせて籠居したことに由来する。延喜式では毎年四月十五日から七月十五日の間、経の講読を行うとされる。

持統四年は五月十五日に内裏で「安居」が始められており、「是の日」とは「安居」の果てる日であろう。七寺の僧侶に布施が与えられ、別途、草壁皇太子のために追善供養がなされたというのだ。草壁の薨去は前年の四月十三日だから、その一周忌に続いて行われた供養の「安居」であつたと思われる。渡瀬は「皇太子の為に、三寺……」の「三寺」に着目し、「延喜式」の記載を基に、三寺の中に「崇福寺」が含まれると論考する。

「崇福寺」とは『扶桑略記』などによれば、六六八年に天智天皇の命により近江大津宮の北西の山中に建立された寺である。延暦年間には十大寺に選ばれるなどして栄えたが、たびたびの火災で衰退し室町時代に廃寺となった。昭和三年からの発掘によつて寺跡が確認され、現在は「崇福寺跡」として国の史跡に指定されている。

渡瀬は「延喜式」の記載から、この寺で毎年十二月三日に天智天皇の国忌が行われたこと、四月十三日から三日間に「悔過^{けか}」が行われていたことを指摘し、この「悔過」が草壁皇太子の忌日に関わるものと論証した。つまり、天智天皇が大津京鎮護のために発願した崇福寺で、天智の嫡孫である草壁皇太子の供養が長く続けられていたことになる。

草壁皇太子は、即位こそならなかったが、父（天武）、母（持統）、文武（息子）、元明（妃）、元正（娘）、聖武（孫）と、明日香から奈良時代にいたる代々の天皇の肉親、近親であり、天武・持統の皇統を後に伝えるメルクマールの存在であつたといえる。

草壁皇太子亡き後、持統は幼い孫の軽皇子（後の文武）に皇位を継がせようと決意して自ら即位する。そして、孫皇子の無事な成長を見届けるため、草壁による鎮護と守護が祈願された。その「草壁皇太子の慰霊には近江朝の鎮魂を必要とした」のである。^{*7}

壬申の乱は、天智が晩年に息子の太友を皇位後継者としたことに端を発した戦乱である。天智が望んだ皇統の継承者を、天武・持統が抹殺したわけだから、天智の怨念は当然彼らに向けられよう。

その憤怒と怨念をいやすため、近江京そのものを鎮魂の対象とするのは優れた着想だった。自分たちが近江京を滅ぼした事実是不問に付し、衰亡の悲嘆のみを叙情的に歌い、近江朝の後継者太友皇子の存在はもともと無かつたものとし、天智天皇の皇統は正統と認める、そんな政治的に複雑な要求を人麻呂は歌の技量によつてアクロバティックにこなして見せた。

「近江荒都歌」を誰よりも欲し、その出来映えを喜んだのは、父帝天智の近江京を夫の天武とともに滅ぼし、太友皇子から皇位を篡奪した持統その人であり、壬申の乱を勝ち抜いた大和側の大宮人たちであつた。

「近江荒都歌」の成立時期は不明だが、通説では、成立年代の明らかな持統三年の「日並皇子挽歌」（草壁皇子挽歌）とほぼ同時期かその前後とされており、^{*8}草壁の死と作品との関わりが、その点でも確認出来るよう。

人麻呂は、持統をはじめとする朝廷内の衝撃と動揺を一身に引き受け、集団の情調に抒情的形象を与えたことになる。作品は持統朝の人々に好評を博したが、そのテーマは人麻呂個人にも深く刻印され、廃都近江にまつわる名歌が遺された。次に、巻三のよく知られた二首を、「近江荒都歌」との関わりで読んでおきたい。

3 「いさよふ波」の意味について

柿本朝臣人麻呂、近江国より上り来る時に、宇治河の辺に至りて作る歌一首

もののふの八十^{やそ}宇治川の網代木^{あじろぎ}にいさよふ波の行くへ知らずも
(3・二六四)

この歌の前には、同じく題詞に「近江国より上り来る時に、^{刑部}垂麻呂^{たりまろ}が作る歌一首」と記した「馬ないたく打ちてな行きそ日並^{けなら}べて見ても我が行く志賀にあらなくに」があり、「馬をそうひどく鞭打って速めるな。何日か逗留して見てゆける志賀ではないのだから。」と歌っている。景色のよい「志賀」をせめて馬上から、ゆっくり眺めながら行きたい、というのだ。

遙々とひらけた琵琶湖の湖畔は、内陸の飛鳥京にはない風光を感じさせる。作者はおそらく官命で近江に赴き、その帰路に近江の地への挨拶として歌ったものと思われる。

「志賀」は大津市北部を指し、湖畔には「唐崎」や「志賀の大わだ」があるのだが、刑部垂麻呂の「志賀」は「近江荒都歌」とは全く別の、屈託ない表情を見せている。

人麻呂も同様に、公用で近江を訪れ、飛鳥へと還る途上に宇治河のほとりで詠んだのだろう。その旅が「近江荒都歌」を創作した時

のものかどうかは分らないけれども、一世を風靡した名作の余韻の中で作られ、鑑賞されたことは間違いない。

「もののふ」は中古から「武士」のみを指すようになるが、本来は「文武百官」、朝廷に仕える者のことをいった。『万葉集』では、数多くの氏人が朝廷に仕えることを「もののふの八十伴の雄」「もののふの八十氏人」と歌うが、その用例は大伴家持など、人麻呂より後の作者によるもので、人麻呂作品から摂取されたと考えられる。

「もののふの八十」を「氏」を導く序詞とし、同音の「宇治」にかけて用いたのは、人麻呂の創意ではなかったろうか。「氏」から「宇治」へと連想を飛ばせたところに、朝廷の公務に携わる者の自覚と自負とを読みとつてもよいだろう。

「網代木」は「網代」の意味と同じで、川に杭を並べて打ち、その杭に簀をわたして魚を追ひ込む仕掛である。初冬、宇治川や田上川で「氷魚」をとるのに用いられた。中世には仏教的殺生観から禁止されたが、平安時代には宇治の代表的景物とされ、歌語としてしきりに取り上げられた。藤原頼通による宇治の平等院鳳凰堂の扉絵にも、「網代」が描かれている。

下の句の「いさよふ」は「躊躇し、ためらう」ことで、ここでは波が網代木に遮られて停滞するさまをいう。結句「行くへ知らずも」の「も」は詠嘆、文字通り「行方が分からないなあ」となるのだが、下の句の解釈と鑑賞については問題が残る。

下の句に仏教的な無常観を読みとつたのは古くは契沖で、以来、

人麻呂の歌に『方丈記』冒頭の水に浮かぶ泡の儚さや、『論語』の「孔子川上の嘆」を重ねて鑑賞されることも多かった。

その点について、近世末期の鹿持雅澄による『万葉集古義』が「其処の景の目の前にうかびて、見るやうに思はるるは、上手の作なればなるべし。然るを契沖が、世の中の無常をたとへたる意に、解なせるより、誰もしか意得来れるは、作者の意に背けり」と対立した意見を出したことに着目したのが土屋文明である。⁴⁹

文明は二つの解釈について「一つが是で一つは非といふことにはならぬ」としながらも、実景描写を重んじる「アララギ」の歌人らしく、歌の情景そのものを適確に読まねばならぬと述べている。

『万葉集』の他の作品から「網代木」が船の運航を妨げるほどの規模であったと推測し、「行くへ知らずも」の句を人麻呂は他の作品（草壁皇子挽歌）でも「行くべき方向がわからない、行くところがない、行きやうがない」という意味で用いていることを指摘した。

その結果、文明の訳は「宇治川の網代木のあたりに流れようとして流れきれずに居る波は、流れゆくべき方もなく湛えられて居る」となり、結句の主たる感動は「しばし流れかねてとどこほる水に對する詠嘆」となる。

文明の訳と鑑賞を初めて読んだ時かなり違和感を覚えたのは、それまで契沖以来の無常観に浸って、一首を読んでいたからに相違ない。そう思つて手元のテキストを読み比べてゆくと、結句を文明訳のように「湛えられて居る」と訳しているものは見つからなかった。

一首の中で「川」「波」とあれば、「行くへ知らずも」は時間と空間どちらに対しても、動きや流れの語感を帯びるから、文明訳には無理があるのだろう。

他のテキストは概ね「波がどこへ行くのかわからないことだ」とし、鑑賞として波の行方にこの世の「無常」を添えているものが多いが、その中で日本古典文学全集『万葉集』（小学館）の訳に注目した。

「（もののふの）八十宇治川の網代木にいざよう波も、同じく行方が分らないことよ。」とあり、頭注には「この歌に仏教的無常観を認める説もあるが、考えすぎであろう。」と明記している。

この訳のみ「いざよう波も」と、列挙を示す助詞の「も」を用いており、「波」とは別の「行方が分らない」何かの存在が示される。それが何なのかは示されていないが、上の句との関わりから、「もののふの八十氏人」と読むことも可能ではないか。そう読んだ時、人麻呂が用いた序詞も、内容的な深みを増すように思われる。

網代木に遮られて飛沫をあげる川波の行く末に、人間一般のあてどなき、つまり契沖の「無常観」ではなく、朝廷に務める文武百官一人一人の行く末の不安を重ね合わせる鑑賞は、「近江荒都歌」の反歌二首にも通じるところがあるだろう。

人麻呂は長歌で栄華を誇った近江京の滅びを歌い、反歌でそこに活躍した大宮人たちの末路を憐れんだのだった。本来流れゆく川の水が、「網代木」という人によって停留し滞った後、どのような命

運をたどるのか。持統朝の官人でもあったとされる人麻呂は、文武百官の一人として、自らの行く末をも見つめていたのではなかったろうか。

前述した、宇治平等院鳳凰堂の扉絵について一言触れておきたい。土屋文明は、「網代木にいさよふ波の行くへ知らずも」から、宇治川の流れを遮るような網代木の仕掛と、白い飛沫をあげて滞る川波の情景を思い描いたが、近年細密に復元模写された鳳凰堂の扉絵に、まさしくその情景を確かめることが出来る。

鳳凰堂内部の各壁扉絵は、現存する最古の大和絵風九品来迎図で、日本の四季と風景の中に阿弥陀如来と諸菩薩たちの来迎が描き込まれている。堂内の北側は春、正面東側が夏、背面西側が冬、南側が秋という具合に、鮮やかな大和絵が復元され、雅な平安時代の四季を今に伝えている。

平等院ミュージアム「鳳翔館」で見る「網代木」は、堂内南側の扉、下品上生図右扉に秋の風物として鹿とともに描かれていた。山間の流れを川幅いっぱいに堰き止める木の仕掛がはつきりと、そこにいさよう白波も見えてとれる。

宇治川の珍しい網代木の光景そのものが、一首成立の契機となったことも十分に納得でき、文明の炯眼がしきりと思われた。

4 〈懐旧〉という主題

柿本人朝臣人麻呂が歌一首

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ

(3・266)

ああ近江の湖。夕波千鳥よ。お前が鳴くと胸がせつないほどに昔のことが思われることだ。

一首に平明な名詞が多く、煩雑な文法の回路を経なくても、「懐旧の情」がすんなりと伝わってくる。「古」とは壬申の乱で滅びた近江京の往時を示すが、人麻呂はそれ以前の「古」も念頭において、一首を創作した可能性を指摘しておこう。

「近江の海」はもちろん琵琶湖のことだ。「志賀の唐崎」や「志賀の大わだ」は湖の一部だが、「近江の海」といえば滔滔と水を湛えた湖面の広がりか思い浮かぶ。まして初句に据えることで、湖そのものの存在感が、歌全体を統べる印象だ。

「近江の海」を初句にした歌が、『日本書紀』の神功皇后摂政三年の記事に二首伝えられている。日本古典全書『上代歌謡集』(朝日新聞社)から引用しよう。

淡海あふみの海瀬田わたの済かつりに潜ひそく鳥目いさほろにし見えねば 憤いきどほしも

(紀三十)

淡海あふみの海瀬田わたの済かつりに潜ひそく鳥田たながみ上う過ぎて菟道うぢに捕とらへつ

(紀三十二)

作者は武内宿禰。昭和の軍国教育では、三百歳もの長寿を保った忠臣として大いに喧伝された伝承上の人物である。『日本書記』は皇位をねらう忍熊王との戦いを詳しく載せ、近江へ後退余儀なくされた忍熊王が大敗し、琵琶湖に身を投げて死んだと記す。

一首目は、その屍をいくら探しても見つからず、忍熊王を水中に潜る水鳥にたとえて悔しがっている。数日後に屍は宇治川で発見され、「水中に潜って隠れた鳥が田上を通って、宇治まできてようやく捕らえたよ」と歌うのが二首目である。

武内宿禰説話は『風土記』には全く見られず、七世紀後半に中央で作られたものと考えられている。^{*10}

天武朝に史書編纂の機運が高まり、記紀成立にむけて編集作業が進められていた時期と人麻呂の活躍期は重なっている。儀礼歌作成にあたって、天皇家の神話と歴史は必須の前提知識でもあったろう。人麻呂は武内宿禰の歌として伝わる二首を思い浮かべながら、古来多くの敗者を呑み込んだ「近江の海」というイメージで歌い出した可能性も視野に入れておきたい。

「千鳥」についても同様に、記紀の上代歌謡から人麻呂に連なる表現を見出すことができる。同じく『上代歌謡集』から引用する。

沖つ藻は辺には寄れどもさ寝房ねどこも興あたはぬかもよ浜つ千鳥よ

(紀四)

浜つ千鳥浜よは行かず磯つたふ (記三八)

「浜つ千鳥」の「つ」は連体修飾語を作る格助詞の上代語で、「浜の千鳥」と訳す。一首目は一書あろかみ〔第六〕によれば、皇孫ニニギノミコトの歌である。日向に降臨して木花開耶姫と契り、姫は一夜にして妊娠するが、皇孫は「一夜孕み」に疑いをかける。姫は誓うけひによって疑いを晴らす、その後、皇孫を怨んで近づけようとしな。そこで皇孫が、「沖の海藻は波に靡いて浜辺に寄るのに、我が妻は共寝の床も与えぬことだ、浜の千鳥よ。」と憂えた歌である。自業自得といえようが、夫婦和合のシンボルとされる千鳥に愚痴をこぼしているところが何とも人間的だ。

二首目は『古事記』が伝えるヤマトタケルの白鳥悲傷説話に組み入れられた歌である。伊吹山の神の平定に不覚を取ったタケルは、疲労困憊の末に三重の能煩野で息絶える。遺された妃たち皇子たちはその地に下り、御陵を作って「匍匐おほみはふり廻りて哭き歌よみいはひもとほ」した。その時の歌四首が「大御葬歌」として天皇崩御の大祭の儀式に歌われ、『古事記』編纂の時点でもなお歌われ続けていることを記す。引用歌はその四首目である。

御陵のそばで悲傷慟哭する妃や皇子たちの前で、タケルの心霊が白鳥になって天翔け、浜に向かって飛んで行く。遺された者たちはその白鳥を追ひ、足の痛みも顧みずに荒れ地を走り、海中を行きな

ずむ。そうした場面が三首の歌となり、白鳥が磯に飛来した時に四首目の引用歌が歌われる。「よ」は経過を示す助詞で「くを通つて」と訳す。

「浜の千鳥よ、お前のいる歩き良い浜からは行かず、ごろごろした岩の多い磯づたいに行くよ。」

昭和天皇大喪の際にも歌われたこの大御葬歌、四首とも動作や身振りなど演劇的要素を伴う歌詞である。今でも酔漢のおぼつかない足取りを「千鳥足」というように、四首目が歌われる折には「千鳥」の特徴的な歩行が動作に模写されたのだろうか。

古代日本の葬送儀礼が鳥と深く関わっていたことは、考古学や民俗学の成果で明らかにされているけれども、大御葬歌になぜ「千鳥」が登場するのかは不明である。

だが、上代から近代にいたるまで「千鳥」は日本の詩歌でたびたび歌われてきたごく身近な鳥である。長い年月、多くの詩心を誘い続けた千鳥であればこそ、古代の葬送に登場しても不思議はないと思われる。

「浜つ千鳥」は助詞で名詞を繋いだ和語であるが、人麻呂は「夕波」と「千鳥」を助詞の介在なしで一語にして見せた。漢字を連ねて新しい語を作り出す、漢文に習熟していた歌人ならではの創意であつたといえよう。

人麻呂が「夕波千鳥」の一首で偲んだ「古」とは、近くて壬申の乱、遠くに記紀歌謡の世界が重層的に揺曳する時空であろう。ただ、

そうした前提をすべて外して読んでも充分味わえ、一首に屹立性がある。「人麻呂屈指の名歌」とされるのも、納得のゆくところだ。

「懐旧の情」というテーマは、現代短歌にいたるまで作歌の重要な領域だが、『万葉集』では人麻呂以前にほとんど例を見ないという青木生子が、過去を「思ほゆ」と結んだ「追懐」の歌として皇極朝の一首を挙げている。青木によれば、過去を意識して主題とした初期万葉唯一の例であり、「この種の表現の先蹤をなすもの」とする。⁴¹

秋の野のみ草刈り葺きやどれりし宇治のみやこの飯廬^{かりいほ}し思ほゆ
(1・七)

「秋の野の草を刈つて屋根に葺いて仮宿りをした、宇治の仮宮の庵が思い出される。」と、かつて赴いた宇治の地での仮寝を懐かしむ内容だ。作者は額田王とあるが、「未詳」の付記があり、編纂者の疑義が示されている。

この歌の次が有名な「熟田津に船乗りせむと……」で、こちらも作者を額田王としながら、斉明天皇の御製と伝える左注を添えることから、どちらも皇極（斉明）天皇に成り代わつて額田王が詠んだと解するのが妥当であろう。右の一首は額田王の最も若い時の作品で、おそらくは十代であつたともいわれている。

皇極（斉明）天皇に歌才を見出され、やがてその息子である天武、天智二人の寵愛を受けた女流歌人の、しつとりと落ち着いた調べが印象的だ。為政者の傍らで得意即妙、臨機応変に機会詩を詠むことを求められた額田の立場は、おのずと「追懐」「懐旧」を主題の一つ

に見出したのではあるまいか。

額田がどんな状況で過去を追懐したかは不明だが、宇治は古来交通の要所であった。大化二年（六四六）に宇治橋が架けられるまで、渡河の人馬が多数命を失ったと伝えられる。皇極が後に重祚して、宮都の造営工事に没頭した斉明天皇であれば、宇治川架橋工事への関心も高く、それに関わる宇治への行幸があつたかとも想像してみたいのだが、放恣な想像は慎むべきだろう。

「懷旧」を故人に絞れば挽歌となる。挽歌における「古思ほゆ」の用例を見ておこう。巻二の挽歌の冒頭は斉明朝で始まり、孝徳天皇の遺児である有馬皇子の辞世歌が置かれている。斉明天皇四年（六五八）、有馬皇子は謀叛の康で行幸先の紀の湯に連行され、帰途の藤白坂で絞首刑に処せられた。

有馬皇子事件は当時、中大兄（天智）が反対勢力や皇位継承の障害になりそうな人物を次々粛正しており、その最後の疑獄事件といわれている。

皇子が紀の湯へ護送される途上の岩代（和歌山県日高郡南部町岩代）で詠んだ「岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む（2・一四二）」「家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る（2・一四二）」は、十九歳で縊られた悲劇の皇子の絶唱として、同情とともに伝えられていった。

事件から四十三年後、大宝元年（七〇一）に持統、文武両帝の紀伊行幸があり、次はその折に随行した長忌寸奥麻呂の二首である。

岩代の崖きしの松が枝結びけむ人はかへりてまた見けむかも

（2・一四三）

岩代の野中に立てる結び松心も解けず古思ほゆ

（2・一四四）

一首目の「崖きし」は崖がけのこと。「岩代の崖の松の枝を引き結んで無事を祈ったという有馬皇子は、再び帰って見たことであろうか。」と歌い、二首目で「岩代の野に立っている結び松よ。その結び目のように私の心は解けず、昔のことが思われる。」といっている。

「結び松」とは、松の小枝を結び合わせて、願いや誓いをかけること。奥麻呂は、死を覚悟した皇子の祈願を悲しみ憐れめば、晴れやらぬ鬱屈した心で「古」が思われる、と歌うのだ。

二首目の下の句は、近江京の滅びを見据えた人麻呂の「心もしのに古思ほゆ」と重なり合うだろう。有馬皇子疑獄事件と壬申の乱、ともに過ぎ去っていまだ消えやらぬ歴史的事件の傷痕を引き寄せ、定型の形を与えることで、悲哀を文芸に昇華させている。

奥麻呂の歌った「懷旧の情」は、有馬皇子ゆかりの地で持統上皇が抱いたものでもあったろう。上皇の崩御は翌年、同二年の十二月である。最晩年の上皇の胸に去来したのは、時の流れに浄化された、すべての死者たちへの追懐ではなかったか。

5 おわりに

最後に「近江荒都歌」を『万葉集』のテキストに置き返して読んでみたい。現存する最古の歌集といわれる『万葉集』の成立に関する記録は、歌集の中にも『日本書紀』など同時代の歴史書にも見られない。各巻の歌の制作年代の範囲、巻ごとの編集方針などから成立時期が推定されてきた。

全二〇巻、約四五四〇首（四首の漢詩と一篇の漢文などを含む）を伝える今日の形に成立したのは、桓武朝初期すなわち八世紀末といわれている。だが、この時期一挙に出来上がったわけではなく、歌集の完結に至るには、八〇年もの長きにわたる増補と更新、挫折と復活の歴史があった。

歌集の形成史は専門家によって幾つもの説が提出されているが、最も早く成立したのは巻一と巻二であり、最終的に大伴家持が編纂に大きく寄与したことは通説となっている。

巻一（雑歌）と巻二（相聞・挽歌）は両方で三大部立がそろうだけでなく、「標目」を立てて天皇の代ごとに作品を配列したり、それぞれの巻頭に、雄略天皇、磐姫皇后という歴史的に著名な人物を作者として仮託するなど、同じ編集方針の意図が明瞭で、勅撰集の様相を呈している。

さらに巻一の五三番歌までは、持統上皇時代（六九七―七〇二）に上皇の発意によって編集されたという指摘があり、『万葉集』の核

となったその部分を〈持統万葉〉と呼ぶこともある。^{*12}

その五三首はいずれも宮廷の公の場で披露された歌々である。巻頭には伝説的大王である雄略天皇の御製が据えられ、続いて持統の祖父である舒明天皇の国見歌が、そして祖母の皇極、斉明（皇極が重祚）、父の天智、夫である天武と、それぞれの御代の歌が連なり、最後に持統朝の藤原宮讃歌で締めくくられている。

〈持統万葉〉の「標目」だけ見ても、雄略へとさかのぼる皇位を持つ祖父母と父、そして夫に続く持統自らの皇統を主張するかのようだ。

つまり、持統上皇自身巻一の五三番歌までに目を通し、選歌や歌の配列に気を配り、意向を反映させた可能性は十分に考えられる。

巻一における持統朝は、次の御製で始まっている。

天皇の御製歌

春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山^{あめ}

（1・二八）

五七・五七・七の悠揚たる調べと、聖なる香具山に対峙する体言止めとが堂々たる帝王ぶりを示し、巻の編次からいっても、持統天皇即位直後に詠まれたものだろう。

意味は平明で、どのテキストも大方「春が過ぎて夏が来たらしい。白い衣が干してあるよ。天の香具山に。」と訳している。夏の到来を思わす白い衣（田植えに先立つ早乙女のみそぎの衣、と言う説もあるが不明である）が、青葉の香具山に眩しく映えている爽やかな情

景で、特に問題などないのだが、私はひそかに結句の体言止めに添える助詞を、主格の「は」で読んでみたいと思っている。つまり「天の香具山」を擬人化し、その山こそが意思を持って、夏の白い衣を干しているのだと。

土地の擬人化は、中大兄時代の天智天皇に大和三山を男女に擬えた作品があるし（1・一三、一四）、前述したように人麻呂の近江荒都歌（1・三〇、三一）などに例がある。作者は、眼前に爽やかな夏の景を現出させた「天の香具山」と交感し、季節の確かな循環を言祝いでいるのではないか。

こうした読みに誘われたのは、この御製が「時の支配者」としての持統像を示す、という示唆に出会ったためである。中国における帝王の任務とは正しい暦を民に授けることだった。その暦とは立春・立夏・立秋・立冬に始まる四つの時を基本にしたという。^{*13}

国家の基盤を支える農耕作業にとって、季節の順当なめぐりは何より重要な前提だ。人為を越えた天文気象を司るのは、古代の天皇の重大な責務であつたろう。こともなく「春過ぎて」、今まさに夏が到来することに安堵し、暦の巡行をも統べる自らに充足する思いを、一首の調べからも読みとりたい。

また、「天の香具山」は持統の祖父である舒明天皇が国見を行った場所でもあつた。巻一の雄略天皇御製の巻頭歌に続き、舒明の長歌一首が置かれている（1・二）。

祖父舒明が香具山に登って「国原は煙立ち立つ 海原は鷗立ち立

つ」と詠んだのに対し、持統はしるしめす国原から聖なるその山を眺望する。国土風土の安寧を祈念する「帝王」の思いが重奏しているようだ。持統のまなざしが「白たへの衣」に向けられているのが、いかにも女性的といえる。

人麻呂の「近江荒都歌」はこの御製に続く。『万葉集』屈指の歌人は、この一連で初めて登場するのだが、晴朗で晴れやかな持統の御製歌をきわやかに支えているように思われる。

壬申の乱の舞台となつた大津京は春日の下に廃墟となり、無惨に亡くなった大宮人たちの魂も、二度と姿を現すことはないだろう。

琵琶湖の湖水は眩しい光を返し、何事もなかったかのように鎮まればかりである。天武の志を継いだ藤原京も、安寧に榮えてゆくに違いない。「近江荒都歌」には、持統の強い祈願が籠められていた。

本稿の執筆は、二〇一六年歳晩に行われた人文研の旅行に参加したことがきっかけとなつた。幾つもの知的刺激を与えて頂き、あらためて人文研関係者の皆様に、感謝申し上げます。雨の近江を朝出発して宇治川を渡り、飛鳥へと移動するバスの車中、近江から帰京を急ぐ馬上の人麻呂が、見えるともなく浮かんで消えていった。

*1 『万葉集』の作品本文は、小学館新編日本古典文学全集『万葉

集1』（小島憲之・他校注一九九四年）から引用する。口語訳に参照したのは同書の他に、旺文社文庫『万葉集』（桜井満訳注一

九七四年)、筑摩書房『万葉集私注一、二』(土屋文明一九七六年)、それに新版岩波文庫『万葉集』(佐竹昭広他校注二〇一六年)、笠間書院『柿本人麻呂』(高松寿夫二〇一一年)の注釈と現代語訳である。

*2 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』二〇〇頁 東京堂 一九九五年

*3 上野理『人麻呂の作歌活動』三五六頁 汲古書院 二〇〇〇年

*4 青木生子『万葉挽歌論』六六頁 塙書房 一九八四年

*5 高松寿夫『柿本人麻呂』一二二頁 笠間書院 二〇一一年

*6 渡瀬昌忠『柿本人麻呂研究』二七〇頁 桜楓社 一九七六年

*7 渡瀬昌忠『柿本人麻呂研究』二七二頁 桜楓社 一九七六年

*8 青木生子『万葉挽歌論』七二頁、渡瀬昌忠『柿本人麻呂研究』二七三頁

*9 土屋文明『万葉集私注二』四〇頁 筑摩書房 一九七六年

*10 井上光貞・他校注『日本書紀(二)』三六〇頁 岩波文庫 一九九四年

*11 青木生子『万葉挽歌論』九〇頁

*12 秋山虔他編集『日本古典文学史の基礎知識』二六頁(伊藤博)有斐閣 一九八八年

*13 小川靖彦『万葉集 隠された歴史のメッセージ』六二頁 角川選書 二〇一〇年